

文久四年二月十八日より文久四年二月十九日まで

P8311094 right

膳部の外硯ふた(\*1)、刺身鉢□並海鼠揚げ（酔にて一器）等を出し、一杯の設ある鉢にて、次分も右に準ぜし品を出せる由、素より杯は出し□、明朝領分出離れ候、慮を以て別段の設ありしなるべし○

途中口占望中千里白清平輿脚着撰、蹴雪

軽匹似春江月朗夜猪牙一葉截波行

十九日 寅 粉雪、朝止薄晴時に飛雪、夕前乱雪紛に夕晴

暁第四字時半前出立、辻に居渡り足軽老人づつ、代官人馬差配役火の廻り役兩人各所に出役天明前海岸に出る、雪晴て残月晴朗積雪は乱山の如く清故、夕は松籠に似る一幅の

活画というべし、南部領馬門番所下座、同所辺よりをそれ山（忍山）烟外に□□同領分前に

付添える役は三名代官一人出役、津軽領入口足軽式つ少輔家来老人出役人足式人

明松枝の兩人の足軽案内同領入口番所には朝上下着の家来（兩人ならん三人下座）、右より手前に家来

P8311094 left

（小湊休）老人出役、狩場沢野立、鈴川野立、朝第九字時半午休所小湊旅宿へ着、同所に家来老人

出役大庄屋出迎へ辻々足軽固め出の休処勤番所を設け、足軽兩人相談の所、酒の肴とし、設ある物也、本夕は番敷辞すべし、休所へ使者さし越す、朝よりソリを用ひ午休所より駕になり）

小休同所にて長蔵より周助□物の外また恙なる由伝聞せり、津軽越中守領分番所には三人

麻上下着用下座少しく行て（同家）家来老人出役また一の険坂を（津軽越中守家来）踏て外ヶ浜

代官出役同所より

支配場内附添且駕陸尺(\*2)遠路□□も可有しに付、別段手人にて用意いたし歟、旨申し聞、右陸

尺の儀は断りをよぶ、浅虫村小休同村には温泉ありて、既に小休所にも浴室あり、同所にては

領主より手当

にて家来一同へ切り飯の設けあり、野内村小休同所町奉行出役（残袴着し）、夕第六字時過ぎ青森旅宿へ着、同所入口□□に浦奉行船奉行出役（麻上下着し）町役人拾数人、何れも麻上下着にて奔走す、当所は□口千五百口談有し由、近來火災ありて□程延焼の鉢なりしが家作新

(\*1)硯ふた(すずりぶた、祝儀の席で魚などを盛る盆状の器)

(\*2)陸尺(ろくしゃく) 駕籠担ぎ人足

( )内は細字双行(一行に小さい文字で二行書き)などの場合です。

□印は解読未了の文字です。私の実力ではすぐ解読できません。

【判読不可】、■は、文章の一部に汚れ、虫食いにより文字が無い等です。